

シャイな人が与える対人印象の実験的研究

——質問紙での回答操作による検討——

澤海 崇文^{1,2} 稲垣 勉^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹教育テスト研究センター ²流通経済大学 ³鹿児島大学 ⁴筑波大学

本研究は、シャイな人が他者に与える印象について、シャイではない人や平均的な人との比較を通じて実験的に検討することを目的とした。特に、日本人がシャイな人に対してどういった印象を抱きやすいのかという点について研究した。102名の日本人大学生が研究に参加し、架空の人物がシャイネス尺度に回答した様子が3種類のうち1つ提示され、その回答者に対する対人印象をSD法により評価した。その結果、シャイネスの低い人は全体的に肯定的な対人印象を与えていたものの、シャイネスが高い人とシャイネスが平均的な人とを比較した場合、善良性や粘り強さといった次元で統計的な違いは観測されなかった。

キーワード：シャイネス，対人印象，活動性，社会的望ましさ，粘り強さ

1. 問題と目的

シャイネスとは、“特定の社会的状況を超えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群”と定義されている(相川, 1991)。他にもLeary (1986)のシャイネスの定義が先行研究で多く引用されているが、その定義の中にも症候群(syndrome)という言葉が含まれている。この言葉から連想されるように、シャイネスに対しては一般的に否定的な語感が暗示されている。特に西洋社会においては、シャイネスは対処すべきものという扱いをされている。

実証研究においても同様の傾向が指摘できよう。例えば、Alm & Frodi (2008)の質的研究では、参加者に対してシャイネスをテーマとした半構造化面接を実施したところ、大半の回答者は、シャイネスの否定的な側面に言及していた(例えば周りに対してシャイネスの高い人は自身がつまらない人であるという印象を与えかねない点)。また、シャイネスに対して日本人大学生がどういった印象を持つか(肯定的か否定的かの二択)を調査した研究によると、約70%の回答者がシャイネスを否定的なものに見なしていた(稲垣・藤井・澤海・相川, 2017)。

以上の先行研究は、シャイネスという言葉に対しての評価や印象を検討した研究であるが、シャイネスという言葉への評価と、シャイな人の行動側面などに基づいてシャイな人に対して下す評価とは別々のものとして捉えるべきであろう。

シャイな人が他者に与える印象も、従来は決して望ましいものとは言えなかったが、時代とともに対人印象や対人判断は変わってくる。現代では、シャイな女性は、男性からかわいいと見なされることもあり(塚田, 2019)、シャイな男性は、女性から愛を感じることもあると言う(ふくだ, 2013)。また、Alm & Frodi (2008)の質的研究のデータにおいても、シャイな人に対しては、話しかけやすいと回答した者もいた。肯定的か否定的かという二者択一の枠組みではなく、詳細な印象を検討する必要性が示唆される。

本研究では、シャイな人が肯定的な印象を与える可能性もあるという現代の時代背景も踏まえて、シャイな人が与えるポジティブな対人印象にも目を向け、シャイな人とそうでない人に対して日本人が抱く印象を実験的に比較する。具体的には、シャイな人の行動

や考えを提示し、それに基づいて対人判断を実験参加者に行ってもらい実験を実施する。その際、シャイな人に対する対人印象を肯定的もしくは否定的という二元的な分類で検討するのではなく、詳細な印象評定を用いる。シャイな人に対する対人印象の比較対象として、全くシャイではない人と、シャイの程度が平均的な人を設定し、シャイな人がどのような対人印象を周囲に与えているのかを検討する。

実験の結果は、対人印象の判断軸によって、シャイな人の印象が良いものであるか否かが変動すると予測される。

2. 方法

2.1 実験参加者 東京都内の私立大学生 102 名（男性 34 名、女性 68 名；年齢 $M = 20.28$ 歳、年齢 $SD = 0.59$ 歳）が実験に参加した。

2.2 材料 実験は質問紙が配布されて実施された。最初に架空の人物のシャイネス尺度への回答が提示された。具体的には、相川 (1991) の特性シャイネス尺度 (Trait Shyness Scale: TSS) への回答パターンを 3 種類作成し、高/中/低シャイ条件を操作した。高シャイ条件では、5 件法で回答する TSS において、架空の回答者がランダムに 4 または 5（反転項目においては 1 または 2）を選択している回答パターンが示された。一方、低シャイ条件では、高シャイ条件と正反対の回答パターンが提示された。中シャイ条件では、回答者がすべての項目においてランダムに 2, 3, もしくは 4 を選択している回答パターンが示された。なお、実験操作の際、これらの回答パターンが実在する人物による回答であり、本人の許可を得て提示しているとの虚偽の説明を行った。

実験参加者は、上記の 3 種類の回答パターンのうち、ランダムに 1 種類が割り当てられ、その回答パターンを見た後、その回答者に対する印象評定を実施した。対人印象は沼崎・工藤 (2003) の形容詞もしくは形容動詞 23 対を採用し、5 件法の SD 法で評定された。

2.3 手続き 実験は講義時間の一部を使用し、集団で一斉に行われた。実験終了後、参加者には虚偽の説明があった旨も添えて、デブリーフィングを行った。

3. 結果

3.1 対人印象の因子分析 SD 法で評定を求めた形容詞・形容動詞の 23 対に対して探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。固有値 1 以上という基準に基づき、3 因子が抽出された。次に、いずれの因子に対しても因子負荷が .40 に達していない 2 対を削除したところ、21 項目が残った。さらに、複数の因子に対して因子負荷が .40 以上を示した 5 つの項目も削除し、最終的に 16 項目が残った。因子分析の結果は表 1 に記した。第 1 因子は“外向的な-内向的な”、“不活発な-活発な”、“暗い-明るい”などの項目が寄与していたため、“活動性”と名付けた。第 2 因子は“人の悪い-人のよい”、“意地悪な-親切な”、“誠実な-不誠実な”などの項目が寄与していたため、“善良性”と命名した。第 3 因子は“粘り強い-諦めやすい”、“責任感の強い-無責任な”の 2 項目が寄与していたため、“粘り強さ”と名付けた。各因子に関して、因子負荷が .40 に達した項目を逆転項目処理後に相加平均を取り、下位尺度を構成した（それぞれ $\alpha = .96, .75, .73$ ）。

3.2 対人印象の分散分析 対人印象を構成する 3 つの下位尺度をそれぞれの分析での従属変数、TSS への回答パターンを独立変数とする参加者間 1 要因分散分析を行ったところ、以下の結果が得られた（下位検定は有意水準 5% の Bonferroni 法による）。活動性得点は低、中、高シャイ条件の順に有意に高かった ($F(2, 99) = 438.44, p < .001, \eta_p^2 = .90$; 順に $M = 4.54, 2.95, 1.84$)。善良性得点は中シャイ条件に比べて低シャイ条件が有意に高いという差が見られた ($F(2, 99) = 3.87, p = .02, \eta_p^2 = .07$; 低、中、高の順に $M = 3.62, 3.26, 3.45$)。粘り強さ得点は低シャイ条件が他の 2 条件に比べて有意に高かった ($F(2, 99) = 12.93, p$

< .001, $\eta_p^2 = .21$; 低, 中, 高の順に $M = 3.46, 2.89, 2.80$)。

表 1 対人印象の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
外向的な-内向的な	-0.969	0.055	0.004
非社交的な-社交的な	0.947	0.011	-0.027
不活発な-活発な	0.944	0.053	0.023
自信のない-自信のある	0.922	-0.088	-0.067
暗い-明るい	0.902	0.039	-0.063
人付き合いのよい-人付き合いの悪い	-0.842	-0.173	-0.079
堂々とした-貧素な	-0.807	0.034	0.036
親しみやすい-親みにくい	-0.786	-0.203	-0.017
重々しい-軽い	0.782	-0.256	-0.130
落ち着きのない-落ち着いた	-0.518	0.129	-0.364
人の悪い-人のよい	0.123	0.808	0.155
意地悪な-親切な	0.020	0.710	-0.018
にくらしい-かわいらしい	-0.041	0.555	-0.067
誠実な-不誠実な	0.228	-0.543	0.231
粘り強い-諦めやすい	-0.155	0.007	0.933
責任感の強い-無責任な	-0.133	-0.261	0.411

4. 考察

分析結果より, シャイではない人に対しては3つの因子すべてにおいて比較的高い評価がなされていたが, シャイネスが高い人と平均的な人とを比べた場合, 善良性と粘り強さの因子においては, 特に差がないことが示された。

ただし, 実験参加者が東京都内の大学生と限定的であったり, シャイな人の実際の行動を観察してはいなかったりと, 本研究で見られた結果の解釈には注意を要する。

今後は, シャイな人の行動を実際に観察して対人印象を答えてもらうといった現実的な場面での検討も望まれる。

5. 参考文献

- 相川 充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究, 心理学研究, 62:149-155
- Alm, C., & Frodi, A. (2008) Tales from the shy: Interviews with self- and peer-rated, shy and non-shy individuals concerning their thoughts, emotions, and behaviors in social situations, *Qualitative Research in Psychology*, 5:127-153
- ふくだりょうこ (2013) ロベタぐらいがちょうどいい? 「シャイな男子にキュンとした瞬間」 <https://woman.mynavi.jp/article/130219-002/> (参照日 2019.05.14)
- 稲垣(藤井) 勉・澤海崇文・相川 充 (2017) 現代の「シャイネス」のイメージ調査, 教育テスト研究センター年報, 2:55-57
- Leary, M. R. (1986) Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp. 27-38). New York, NY: Plenum Press
- 沼崎 誠・工藤恵理子 (2003) 自己高揚的呈示と自己卑下の呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果—実験室実験とシナリオ実験との相違—, 実験社会心理学研究, 43:36-51
- 塚田 牧夫 (2019) 顔は関係ない…!男が言う「可愛い女」の本当の意味 4 つ <https://ananweb.jp/anan/216240/> (参照日 2019.05.14)

